NPO法人 子どものいのちを守る会 https://empowering-children.tokyo/

Protect Children's Life

Empowering Children

4/ 2021
令和３年　４月号
2021 April Edition

SOLAR SCHOOL への挑戦

Challenge to Solar School Donation Program

皆さん　　お元気ですか

ままならぬ時が進んでいます。記念すべき卒業式、入社式等も今のベストで執り行われているようです。一方国民の代表者がこれでもかと繰り返す嘘発言には閉口です。そんな気分を紛らわす意味で４月は５点ほど有名な文の一部をを紹介させていただきます。　　理事長

徒然草　吉田兼好

つれづれなるままに，日くらし、硯にむかひて、心に移り行く　よしなし事を、そこはかとなくかきつくれば、あやしうこそ　ものぐるほしけれ。

何することもなく、一日中硯に向かって、心に浮かんでくる事を書き綴っていると、気持ちが高ぶり書きたい事で頭が一杯になる。

方丈記　鴨長明

ゆく川の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。

川の流れは途切れることなく、もとのままではない。淀みの水の泡も、消えたりくっついたりして同じでない。世の人も住まいも、同じようなものです。仏教の無常観を表したもの。

枕草子　清少納言

春はあけぼの。やうやう白くなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。夏はよる。秋は夕暮れ。冬は努めて。と続きます。

春はなんだって、あけぼのがいい。少しづつ白くなってゆく山ぎわに、紫がかった雲がほそくたなびいている。
＊清少納言は平安時代の女性作家で、ものの見方が大変面白いと言われています。

平家物語

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響き在り。
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。
おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。
たけき者もついにはほろびぬ。偏に風の前の塵に同じ。

祇園精舎の鐘の音は、この世は常に変ってゆくものだと鳴り響く。沙羅双樹の花の色は、どんなに栄えてもいつか衰えるという道理を表します。権力を持っている人でも永遠に続かない。春の一夜のようにはかないものです。強い者もいずれ滅びる。風の前の塵と同じようなものである。
＊これは平安時代の平家一族が滅んでゆく物語です。貴族を目指した平家が京都を追われ源氏に滅ぼされる。

春暁　孟浩然

春眠暁を覚えず
処処啼鳥を聞く
夜来風雨の声
花落つること知るんぬ多少

春の朝の眠りは心地よく、夜が明けたことにも気づきません。あちこちで鳥が鳴いている。夜中に風や雨の音が聞こえた。どれだけ、花が散ったでしょうや。

NPO法人 子どものいのちを守る会
〒162-0805
東京都新宿区矢来町 123　矢来ビル 3F　Tel. 03-5227-1877
お問い合わせ
kdm.mamorukai@gmail.com